

*京都市教育長賞

「白色から始まる十人十色」

京都市立栗陵中学校 3年

岩崎稀匠

私には自閉症の弟がいます。自閉症とは、発達障害の一種で脳の機能が生まれつき上手に働かない障害のことです。症状は多種多様で本当に個性のようです。多くの自閉症の人に共通している所は、多動性で、言語をうまく話せなく、感情表現が苦手によく自傷行為もします。

私は今まで弟との事でたくさんの辛い事、涙を流すほど嬉しかった経験がありました。まずたくさんある辛かったことの中で特に辛く、悔しかった事は、弟が無抵抗なのに一方的に老人が杖で叩くのを怖くて自分が助けてあげることができなかったことです。今の自分なら止める事ができますが、昔はまだ恐怖心があり止める事ができませんでした。私はこのような暴力行為は弱い者いじめとしか思えません。

しかし私の弟に限ぎられたことではありません。世の中には弟のように、抵抗できないことを悪用して虐待をする人がいます。覚えていますか、あのニュースを。7月下旬、神奈川県相模原市にて、40人以上の殺傷事件がありました。そのニュースを見て、たちまち怒りがこみ上がりました。犯人のあまりにも身勝手な行動により、悲しい結末になってしまったこの事件。良いとは言えませんが、その犯人が考えるように「障害者は邪魔な存在。排除すべき。」というような思想を持つことを否定はしませんが、自己中心的な考えで行動して、ましてや殺人などは断じてしてはいけないことです。それに現社会では、障害者と共存することを努力して様々な活動をしていこうとする社会となってきています。その努力を無駄にしたことは、今もがんばっている障害者の当事者に対して、失礼極まりない行為です。今後このようなことが起きないことを心から願います。

私はこのような辛い経験や現実を考えて、弟を命を捨ててでも助けたいと思いました。

そして、何よりも嬉しかった事は、私が小学生の頃によく母に怒られ泣いていた時のことです。母親の説教が嫌でやめてほしいと思っていました。止めてくれる人なんていません。でも、意外な人物が止めてくれました。弟です。その時の動きは本当に止めたくてしているのかはわかりませんでした。その時の様子がまるで母に、「お兄ちゃんを怒らないで。」と言っているように、母と私との間に入ってくるのです。しかもそういう事が何度も繰り返されました。

私の弟は普段、多色のペンで紙に特定の何かを描いたり、巻き尺を波のように動かして、ふと目を離すとその巻き尺の先を一つのずれもなくピンとそろえたり、音楽を聞きながら揺れたり、理解不能な事をしますが、ちゃんとした人間としての純粋な心を人一倍持って

います。そして普段私たちが目をやらないような場所でもしっかりと周りが見えています。私は時々、障害がある人の方が社会に良い影響をおよぼしているのではないのかなど。普通の人だけが社会を担うのではなく障害者も何か人の役に立てると思います。

私の弟は話せませんが人の心はわかります。もし私が弟より早くに命を落とすと、弟はどうなるでしょう。最悪の場合、一人で何も楽しめず苦しんで命を落とすかもしれません。不安です。私の弟は家族がいてやっとなんか生きています。その家族がこの世から去り、彼を支えてくれる人はいると思いますか。そのときの社会はどうなっているのでしょうか。いやこのままの日本ではきっとだめにちがいない。今でも親身になり支えてくれる人は周りには居ますが、まだまだ社会は「普通の人の方が優れていて障害者は劣っている。」という視点から物事が判断されているように思うのです。だからこれからの社会がどう進むべきなのかみなさんも考えてみてください。

私の母はよく私に言います。「みんな自閉症。」と。これは、みんな一人一人の個性が強いという意味です。さらに私の友人はこう言います。「自閉症ではなくて自開症だ」と。これは自閉症の人は、閉じこもっているのではなく、心を開きすぎているということです。自分に対しての素直な心を持っているのが、自閉症です。

人は生まれた時はみんな同じキャンパスの色、白色ですが、その後は人それぞれちがう生き方でそのキャンパスに個性という、さまざまな絵の具をぬります。つまり元々人は同じ白色なのです。

よく十人十色といいますが。白色から始まる十人十色の社会を創っていきましょう。